
異世界にきちまった俺！！

バン・レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にきちまった俺！！

【Nコード】

N7311L

【作者名】

バン・レオン

【あらすじ】

一人の青年が、神によって死に、神によって異世界で生き返った者の物語。

神に殺された青年（前書き）

初めて書きます。不定期で更新していきます。下手だと、思いま
すがよろしく願っています。

神に殺された青年

酷く寒い、空間にただ一人で、立っていたのだ。

「なんじゃここー！」 『おい、聞こえているか？、斉藤 剣仁』
声がした、方に向いて見ると、白ひげを伸ばし、グレーのコトを着た、爺がいた。

「誰だ、お前？ 何で俺の名前を知っている。それに、ここは、どこだ。」

警戒して聞いた。

『わしは、神じゃ』 は、（・・・；）

え と、なんかのギャグか？

『おい、わしを馬鹿にするでは、ない』 何で解った（・・・；）
『貴様の考えは、わかるわい』 とドスの聞いた声で言った。 怖く
え（^ー^；）

「じゃ何で、その神様がいんだ？てか、ここは何処だ ー！」

『ここは、天国と地獄の間じゃ』

は？（・・・；）

「じゃ、俺は、死んだのか？」

『ああ、そうじゃ、お主は、死んでおる。』

「ちよつと待て、何で俺は、死んだんだ」

『それは』

「早く、こ・た・え・ろ」（^ー^） ドスを聞かせて言った。

『解った、解ったそれは、わしのせいじゃ』

「あゝ、何でだ、簡潔に答えろ」

『それは、お主の寿命を書いた、紙をシュレッタ にかけてしまったからじゃ。』

は？（・・・；）

「ふざけるな。おい、くそ神俺を今すぐ生き返せー！」

『無無理じゃ、一度死んでしまったのは、生き返せぬのじゃ。すま

ん」

「今すぐ、生き返すか、死ぬかを選べ」　ドスの聞いた声で言いながら、近づいた。

『ヒイ、ま待て、異世界なら、生き返せるぞ』

「おい、それは、漫画の世界でもOKだよな、そうだろ」

『ああそうじゃ、漫画の世界でもOKじゃぞ、それにいくつか能力を与えよう』　俺は、よっしゃとかんじた。

「んじゃ、世界は、ネギまの世界で、能力は、武術などを達人の域にできるように、様々な銃を使えるように、無限の弾薬など」

ウキウキ（ハ―ハ）

『おいおい、待て銃は、なんのにするんじゃ、それに無限の弾薬は、なんじゃ？』

めんどくせいな、まっいか。

「銃は俺がイメージしたのだ、後、無限の弾薬は魔弾など、後は、魔眼（先読みの目など）な」

俺、ちよつとチートじゃねえ。

『ふむ、少し心細いな？』

そうじゃー！お主にナギの魔力の2倍ぐらいに、ラカンの気の2倍ぐらいを与えようー！』

は（・・・）

「あの、それだと魔力と気の知識を下さいよー！」

『OKじゃぞ。』

「それじゃ、容姿は、リボーンのコロネロ10年後の姿で」

『ほい、これでどうじゃ、後お主に真相の能力を付けておいたぞ。んじゃ行ってこい』

足の下的空間が消えて落とされたのだ。　「へ、いやーー　あの、くそ神ー覚えてろーーー」

異世界に本当にきちまったー！（前書き）

では、第2話いきます。

異世界に本当にきちまった！！

「なんじゃここ！？」

何で俺は、パラシユートなしで空を落下してんだ！？

『おい、聞こえてるか？』

「おい、このくそ神何で俺は、こんなことになってるんだ！！」

『いや、転送する場所を間違っちゃったから。本当にすまんの』
「嘘ー、早く何とかして！！」

『おい、後お主にもうひとつ能力を付けといたぞ。その能力は、漫画などの武器・技などを使えるようにしといたぞ、その名は、空想現実変換じゃ』

(・o・)

「えーと、その能力は、とある魔術の禁書目録のイノケンテウスやドラゴン・プレスなんかを現実にすること？」

『そうじゃ、んじゃ後がんば、それと時代は、ナギが紅き翼を使った時じゃ』

「やったぜ」そのまま、落下していく剣仁だった。

プロフィール

名前： 齊藤 剣仁 さいとう けんじ

能力：仮想現実変換
るチートの能力)

(漫画などの武器・技などを使え

魔眼(先読みの目・千里眼など)

無限の弾薬(そのままの意味)

性格：めんどく下がりやだが、仲間や知り合いには、優しいが、敵には、死を与える(戦闘時は、たまにバーサーカー状態になる)

主な武器：デザートイーグル(各種弾頭を使えるように改造してある)

H & amp; K USP (ドットサイト・マガジン増量付き)

L96A1(剣仁仕様)

アスカロン(インデックス)

バスターソード(ffの某キャラの)

魔法・魔術：魔法は、火 風 雷 闇 系が得意

魔術は、イノケンテウス・ドラゴンブレスなど(ほとんど、インデックスの)

奴らにあつて

いまだに、落下していく剣仁

「いくぜ!!。」 リボーンのザンザスが使った銃と弾を現実に出したのだ。デザートイーグル

「イツヤツハハハ、空を飛んでるぜ!!さてここは、どこだ?」

ん?向こうから音がする
な?。行つてみるか。

「ナギサイド」

「へ　いくぜ!」

「うおっ　たくさんだと!?!」

ドウツ!!!

ナギがたくさん!?!　てかあれて、ラカンか??

てことは、ラカンがナギ達にケンカを売った時か!!

ドカン

「へっ?」

今、顔のすぐ横を剣が通つたよな。

ブチッ

「あゝいゝつゝらゝここで殺す　殺す!!」

両手にデザートイーグル（ザンザス機能）を持ちナギとラカンに肉薄してつた剣仁だった。

「アル・ゼクトサイド」

ナギとラカンの戦いを観戦していると一人の少年が乱闘の中に入っ

ていたのです。

「おや？ゼクト あの少年は、何者ですか？」

「ふむ、わしも今きずいたところじゃぞ」

ドカン ドカン

ガガガガガガガガ

「おや彼は、ナギとラカンの相手をしながら戦っていますね」

「そうじゃな、ん あの技は、なんじゃ？」

く ナギ・ラカンサイドく

なんだあのガキは、銃を構えてるが？。 ガガガガガガガガ な

なんだあの技は、そこらへんの大地が、削られてるぞ！？。

俺は、紅き翼を潰そうと戦っている最中にあのガキが入って来たんだ。俺でもあの技を食らったら、ただじゃないすまないと感が、叫んでる！？。

く 剣仁サイドく

「てめえらの攻撃が、俺にかすっただろうが！！」

声を荒げて言いながら奴らに憤怒の炎で攻撃していた。

く 13 時間後く

やっべー、やり過ぎたか？周りがスゲーことになってるし。

まあ、あいつらだって、千の雷やら、やっべーのを連発してたからいつか。

「おい、あんたら大丈夫か？」
やっぱり、最後の一撃がやばかったか？

紅き翼にあつて!!

く剣仁サイドく

「おゝい、生きてるか?」

とナギとラカンが木の枝でつついた。 やっぱ、最後のがやばかったか?。

てか、まだ起きねーどうしよう?。

あつ、向こうにアル達居んじゃない、あつちで飯でもご馳走するか。

くアル・ゼクトサイドく

「彼のは、なんて、能力でしょう?、ゼクトあなたは、どう見ます?。」

と隣の人に聞いています。

「ふむ、魔力も気も感じなかったの? それよりもあの炎が一体なんじゃ?」

と少し困ったように言う。

「おや? どうやら彼のほうから来たよですね」

くナギ・ラカンサイドく

「うつ、イッテく」 なんだったんだ、あれ?

てか、筋肉ダルマも起きやがったし。 それよりも向こうの方から声と良い匂いがするな?。

「くっ！、ありやなんだんだ？」

周りを見回すと、赤髪のカキも今起きたようだな。なんだ？この良い匂いは？。

く剣仁サイドく

アル達に自慢の料理を振る舞っていると、ナギとラカンがやっと起きたようだ。

「おゝい、お前ら大丈夫か？ とりあえず飯でも食え」と皿にチャーハンを盛り、2人に渡した。

「うまいですよ」

「うっ うまい」

「ふむ、うまいの」

上から、アル 詠春 ゼクトと感想がきた。

「そうか？ んじゃ食べてみるか？」

ナギとラカンが食べた。すると

「くっ うめえゝ！！」

「おい、これどうやって作ってるんだ？」

ナギが俺に質問してきやがった。

「あつ、んなの普通だろ？」

「そうか」

ナギなんだその言い方。

「おい、それよりもお前は、誰だ？」

「あゝ そういえば、名のつてなかった俺の名は、斉藤 剣仁だ、剣仁で良いぜ。紅き翼の皆さん」

「そうだな、こっちも名の「いや、言わなくて良いぜ、全員知ってるから」そうか」

「てか、そこにいる筋肉ダルマも仲間か？」

「お前ら、紅き翼に入れ」

「何っている！？、ナギ！？」

おつ、詠春が反論してるな。

「つえゝから、良いじゃねかよ、だろアル、師匠？」

「私は、構いませんんが」

「ふむ、わしも良いぞ」

すげゝ俺のこと調べないのか？。
まっ、いつか。

「んじゃ、入るってことで、剣仁って呼んでこれ。」

いやったぜ！！、これで原作に突入だぜ！！。

紅き翼とのしばしの別れ!?

く剣仁く さあ、ただいまグレートブリッジ奪還作戦の最中です!!。

「おい!! ナギあの鬼神兵を潰すぞ!!」

「はっ!! 言われなくとも判ってるぜ!!」

剣仁は、鬼神兵にデザートイーグル（ザンザス機能）を2丁を向け、
「いけ!! 怒りの暴発!!」

ナギも鬼神兵に「いくぜ!! 千の雷!!」

ガガガ ドウツガ

ナギとのコンビ技で鬼神兵を潰したのだ。

アルと詠春は、ザコ兵を潰し。

ラカンとゼクトは、戦艦を潰してたのだ。

いつの間に他のメンバーが敵を潰してたんだ？。

戦闘後

く剣仁サイドく

今は、一人堤防のところで休んでいた。 「は、疲れた」 や

り過ぎたな、何しろナギは「千の呪文の男」と呼ばれてたしな、俺なんて「炎神^{えんしん}」やら「孤立のガンナー」・「破壊神」て、感じに呼ばれるし。

多分、炎神は、憤怒の炎とイノケンティウスを使っただけだろう、孤立のガンナーは、単独で兵士を潰してただけだからだと… 破壊神は、戦艦をドラゴンブレスや決別の一撃だな。と考えてると

背後から足音が聞こえる。

「おい、剣仁何やってんだ？」

ナギが俺に聞いてきやがった。

「な、ナギよ？ちよいと、俺だけ単独行動して良いか？」
ナギが不思議な顔をしている。

「何でだ？ 剣仁になおする気だ？」

俺は、少し困った顔でこう言った。

「あのな、ナギよ、今までの戦いでどれ程の戦争孤児が生まれただけか？ 俺は、そいつらができるだけ助けたいんだ。解るだろ？ナギ」

「ま、良いんじゃないか、なんかあったら？連絡するわ」

俺は、いつも感じてこう言った。

「ありがとうよ、ナギんじゃ今から行きますか」

「剣仁、死ぬんじゃないぞ」

俺は、夕焼けを見ながら、ナギに言った。

「おっ！」

紅き翼を離れて…（前書き）

文才がほし〜です。

紅き翼を離れて…

く剣仁サイドく

グレートブリッジ奪還作戦後俺は、ナギ達とは、離れて単独行動をしている。

理由は、戦争孤児の救済なんかだ、まっ裏では、「完全なる世界」の各支部を潰す気だから。

で、俺は、今立ち寄った村で虐殺の最中だ。

「おいおい、いきなり立ち寄った村で殺しの真っ只中でよ」

ん、あれ、あの武装は、確か帝国の部隊だな。だとすると、敗走兵か？「嫌！！！」崖の下から悲鳴が聞こえるな？

「止めて！！！」

幼い女の子のか？まあ考えるのは、後だ。

愛銃を持って、崖を飛び降りた。

く？？？サイドく

何で？いつも道理の朝だったのに帝国の兵が来るの？

母さんや他の人は、奴らに捕まってるし

崖のところまで来れたが、奴らがまだ追ってくる、腕を掴まや必死に抵抗した。

「嫌！！！！」

服を脱がされそうになり

大声で

「止めて〜!!!」 と叫んだ時上から

「よう、てめえら覚悟は出来てるよな!!!」

青年が落ちてきた!？。

く剣仁サイドく

襲われそうな少女を助けるためだが…。

「よう、てめえら覚悟は、出来てるよな!!!」
て格好つけちまったぜ。

まあくその後は、デザートイーグルとL96A1（狙撃銃）での虐
さでは、なくいちを気絶で済ませておいた。殺られた敵は、村の
中心部に集めておいた。

「ヒデくなこれ」と村を見渡していた。なにしろ、そこらじゅう死
体や焼かれた家ばかりだ。

で俺の足下には、手足を撃ち抜かれた盗賊がいる。

何で盗賊だつて解ったかだと？

崖下にいたエセ帝国兵をとっちめたら、自分達は、盗賊だとか、戦
場から死んだ帝国兵の鎧を取って、その鎧を着て村を襲っていたと
自白した。

助けた少女の家族は、盗賊達に殺されていた…。

俺は、泣いていた少女にこう言った。

「なあ、お前が良いのなら、俺に付いてこないか？」

少女は、俺を見上げて尋ねた。

「本当に良いのですか？」

「なあゝに、一人増えたところで変わらないからな」

「ありがとうございます」

「そういえば、自己紹介がまだだな、俺の名は、斉藤 剣仁だ一応紅き翼の一員だ」

「えっ！！ あの紅き翼のですか！？」
驚いた顔をしている。

「そうだが、それがどうした？」

「じゃあ あなたが、炎神ですか？」

「そういえば、そう呼ばれてるな」

少女がまた驚いた顔をした。

「おゝい、大丈夫か？ そろそろそっちの名を覚えてくれ」

「はっ はい！！」

私の名は、アリシア ホーバー・アリシアです。 よろしくお願
いします！！」

元気が良い子だな。

「アリシアが良い名だ」 と少し笑いながら言った。

「アリシアサイド」

村に戻ると、両親がしに家が焼かれていた。

私は、泣いていた時助けてくれた人がこう言った。

「なあ、お前が良いのなら、俺に付いてこないか？」

私は、驚いて上を向いた。

恐る恐る聞き返した「本当に良いのですか？」

「なあ、一人増えたところで変わらないからな」

私は、心から驚いてこう言った。 「あり

がとうございます」

「そういえば、自己紹介がまだだな、俺の名は、斉藤 剣仁だ一応
紅き翼の一員だ」

「えっ！！ あの紅き翼ですか！？」

嘘！？ この人が！！

「そうだが、それがどうした？」

ま まさか？

「じゃあ あなたが、炎神ですか？」

剣仁さんは、右手で頬を擦りながら
「そういえば、そう呼ばれてるな」

えっ！？ この人が！？

「おい、大丈夫か？ そろそろそっちの名を覚えてくれ」

「はっ はい！！」

私の名は、アリシア ホーバー・アリシアです。 よろしくお願ひ
します！！」

「アリシアが良いんだ」 剣仁さんが、少し笑いながら言ってくれました。

私は、頬を赤くなってしまうました。

紅き翼を離れて!! 2 (前書き)

文才が!!

次号は、かなり飛ぶと思いますがよろしく願います。

紅き翼を離れて！！2

く剣仁サイドく

アリシアと会ってから2週間がたち、ナギ達は、アリカ姫を助けたようだ。で俺は、「完全なる世界」の支部を潰してる最中だ。

「完全なる世界」の施設に侵入するとそこには、人の腕や足などが液体につけられているカプセルが無数にあった。

「アリシアを連れて来ないで良かった」てか奴らは、何をここでやっていたのだ？

なんだ？この声？

「助けて 助けて」

「ここから出して」

通路の奥から聞こえてくる。

かなり広い鉄格子の部屋に20人ぐらいの幼い子供達がいる。

一人一人が色々な傷をおっている。

腕がないやつ、生きる気力がないやつもいる。

俺は、手のひらから憤怒の炎を出して、鉄格子を壊し、俺は、そのままさらに奥に進んでいくと。

二人組の研究者が台の回りで話してた。

「また失敗か？」 金髪の白衣を着た男が言った。

「えー 一体どこが間違っているかが解りませんわ」

銀髪の白衣を着た女が言った。

「これでは、材料が尽きてしまう」

「平気ですわ 誰が戦争孤児何かを助けるのですか？」

あいつら、戦時中だからこそ、非合法な実験をしていたのか。だがいくつか疑問が残るな？まああいつらを捕まえれば解ることだ。

おつ、考えてる内に金髪の野郎が奥の部屋から泣く幼い子供を連れ出した。

「早くこい！！」うるせい野郎だな。
そろそろ俺も登場するかな。

「貴様ら！！ その悪事を成敗してやる」と言いながら、出てきた。俺

「なっ！？ 何者だ、警備兵は、何をしているのだ！！」
金髪が叫んだ。

「うるせい！！」
てめえらは、ここで死ぬんだよ」

「「なっ！？」」 研究者達の顔が恐怖でひきつった。

「だが、例外がある俺にここの研究内容を話せば見逃してやる」

銀髪がひきつったまま言った。

「ここの研究内容は、人体強化と人体の一部を悪魔化させる実験よ」

（何、人体強化だ あれは、戦いの歌があるはずだ？。それよりも、人体の悪魔？ こいつら、頭がおかしいぞ？）

「ば馬鹿にしてるわね！？」

銀髪が言った。

俺は、「馬鹿じゃなければ、おかしくなった？」 と言った。

「人体強化とは、魔法や気と違い幼い頃から人体に他の細胞何かを植え付けことだ、そして悪魔化は、召喚した悪魔を人体の一部にやどすことだ」

と金髪が言った。

「それなら、もうひとつお前らどこの組織の所属だ？」

研究者達は、黙ってしまった。

「お前ら、「完全なる世界」の仲間だな」

研究者達は、驚いた顔で俺を見た。

銀髪が恐る恐る聞いた 「まさか？炎神？」

俺は、殺気を放ちながら「そうだ、紅き翼の炎神だ、欲しい情報も手に入っし 取り敢えず、お前ら死ね」

研究者達の顔が恐怖で固まった。

「んじやな」

右手に憤怒の炎を出し研究者達を焼いた。

「ま 待てゝ!!」

研究所外

さて、あの研究所は、潰したが…。あの研究所に50人ぐらいの孤児が、居たため全員を外に連れ出すのが大変だったぜ。

アリシアと合流して状況を話した。

「アリシアサイド」 剣仁さんが、たくさんの子供を連れてきたのには、驚きました。

「え」と、剣仁さんは、紅き翼としてこの戦争の黒幕を倒すのと戦争孤児を助けること、ですか」
アリシアが俺を見ながら言った。

俺は、アリシアの視線に耐えられ無くなり

「すまん、本当は、もう少し早く言うつもりだったのだから…」

アリシアは、俺を見て少し笑いながら

「平気です。 ですが今度からは、早く言って下さい」

「そうだな、今度からは、ちゃんと説明するよ」と俺は、言った。

「それよりも、この子達をどうします？」 アリシアが困った感じで言った。

「それなら、平気だどこかに孤児院を作るから、金や設備は、俺が何とかするよ だから、アリシア 君が、この孤児院の院長になっ

てくれ」

少し微笑みながら、「私で、良ければ」

「アリシア、ありがとう。」

俺は、そう言って頭を下げた。

最終決戦！！！（前書き）

少し長いです。

最終決戦！！！！

「剣仁サイド」

いや、久しぶりにナギ達に会うな。

6ヶ月振りか、その間何をしてたって？

「完全なる世界」の関連施設を潰したり、孤児院を増設したりして大変だったな 孤児院の名は、「フリー・ウイング」で名だ、もちろん院長は、アリシアだ。

「は、一体どうしたんだ、ナギ達は、？」

3日前

俺は、いつもどおり、「完全なる世界」の関連施設を破壊してたら、いきなりナギ達から連絡がきたのだ。

「よう、剣仁そっちの方は、どうだ？」

こっちは、お前がくれた「完全なる世界」の情報で本拠地が解りそうで、最終決戦の準備をするから早く来いよ！！」

俺は、やっとかと実感しつつ、やるべき事を思い出す。

1つ、連合の元老院を潰す（完全なる世界関係）。

2つ、親玉をナギと一緒に倒し、正体を知る。

今、考え付くことを考えた。

考えてる内に、ナギ達にあった。

「おっ！ おひさ、ナギにアル、師匠、ラカン、詠春」

「おう、久しぶりだな剣仁勝負しろ」ナギは、相変わらずだ。

「ええ、久しぶりですね」アルは、普通だ。

「ふむ、どうじゃ魔法の方は？」師匠は、本当に心優しいな。

「おい、久しぶりに力比べやらないか？」ラカンもナギと一緒にだ。

「剣術の方は、どうだ」詠春も師匠と同じで優しいぜ。

くその夜く

俺達は、近くの酒場で酒を飲みながら「明日は、いよいよ敵の親玉を潰すぜ！！」 ナギ張り切ってるな。

こいつら、二日酔いだけは、するなよ。

俺は、酒場を後にした。

丘の上で一人、夜景を見ながら飲んでいる。

背後からゼクトの声が聞こえてきた。

「剣仁よ何しておる？」

「師匠、俺は、ナギ達に会って良かったと思います。」

「なぜ、そんなことを聞く？」

俺は、星を見ながら 「多分、最後の戦いで誰かが死ぬと思ったからです」

「そうか、だがの剣仁、人はいつか死んでしまふのじゃ」

「師匠、ありがとうございます」俺は、ゼクトに礼を言いその場を去った。

〳〵翌日〳〵

ラカン事、6ヶ月の激戦で映画なら三部作、単行本なら14冊を書けると言っていた。

「完全なる世界」の本拠地が世界最古の都・王都オスティア・空中王宮最奥部 墓守り人の宮殿

「不気味なぐらい静かだな……」

ナギ、お前どうした？

しゃ〜ね、

「はっ、どうせ奴らは、負けた後の事でも考えてるんだろ」

「はっ…… そうだな……」

俺が、後ろを振り返ると、

「ナギ殿、剣仁殿……」

「なんだ、敵が動いたのか？」

「いえ！、 帝国・連合・アリアドネー混成部隊準備完了しました」
若き頃のアリアドネー総長セラスだ。

「んじゃ、ナギ行こうぜ、親玉を潰しに」
と言いながら、立ち上がった。

「あ、あのナギ殿、剣仁殿、サ、サインを下さい」

「ああ 良いぜ ほらよ剣仁」

「よつと」

「んじゃ、行くか！」 ナギ張り切りすぎ まあ、いつか。

「おい、ナギ 一番槍を俺にやらせろ」

「良いぜ！」

俺は、自分の最大の能力を使うために敵のアジトに向き、身構えた。

「いくぜ！！」

仮想現実変換発動！ 座標ロックオン！！ 放たれる俺の最強技
メテオド・インパクト！！！！」

空から突如大量の隕石が、降ってきた。
ズガッガガガ！！！！

敵がぶっ飛んだり、焼かれたりして3分の2ぐらい倒したな。

「行くぞ、ナギ」 と俺が後ろを振り返るとナ

ギ達が、引いていた。

本拠地内部

居やがったぜ。

「やあ、千の呪文の男、炎神、また会ったね？、これで何度目だい？僕達もこの半年で随時と数を減らされてしまったよ」

「話が、長すぎるぜ！！！！」

銃に装填してあつた憤怒の炎を打ち出した。

「やれやれ、せつかちだね、まあいいか」

ナギは、銀髪に向かつていた。

俺とアルは召喚士に向かつていた。

「アル、重力魔法で相手を止める！！」

「解りました」

俺は、憤怒の炎を銃に最大まで溜め

「いつけ！！、決別の一撃！！！」

と敵に向けて放った。

ナギが銀髪の首を掴んでいた。

ヤバイ！！

「ナギ！！　そこから離れろー！！！」

ナギの胸を光の線が貫いた。

「む、まずい！」

「絶対防御！！」
ゼクトが放った。

俺も後に続き

「こい、鉄壁飛躍式！！！」
数多くの攻撃にさらされながらも、耐え抜いた、盾を出した。

んなっ！？、

鉄壁飛躍式にヒビが入った！？。

「グアアアア！！」 俺は飛ばされて、左腕があらぬ方向に曲がっている。

ラカンは、両腕が吹き飛ばされてる。

他も大なり小なりの傷を負っている。

ナギが立ち上がり

「アル！！ 俺の傷を治せ！！」

「ですが！？、それで「30分持てばいい」……解りました」

「俺も行くぞ！！」 ナギ達が俺に振り替えて。

「だめだ、そのく「ふざけるな、俺は諦めないぜ」　そうだな」
とナギと俺は立ち上がった。

「ま、待て！　ナギ、剣仁　あいつは、ヤベー！！！！」
ラカンが言ってきた。

「ラカン、そこで俺とナギの戦いを見とけ！！」
俺は、ラカンに背を向けながら言った。

「行くぞ、ナギ　あいつを倒して笑って帰るぜ！！」

ナギは、笑いながら　「そうだな、あいつを倒して笑って帰るか」

創造主の前

「剣仁！！　ありがとうよ付き合ってくれて」　ナギは、少し笑って言った。

「当然よ！！、仲間だからな！！」　俺は、言ってやった。

「行くぞ、創造主!!」俺が言った。

ナギと突撃していった。

ナギと俺は、千の雷とドラゴンブレスを放った。

「いつけ!!!」

ナギ

「吹き飛ばせ!!!」俺

だが、それだけやっても、創造主は、倒れない。

「は は は」

俺達二人は、魔力が付きかけている。

「ナギ、千の雷を後何発打てるか？」

俺は、疲れきった顔で聞いた。

「後、一発が限界だな」ナギが言った。

俺は、覚悟してナギに言った。

「ナギ、俺は、今から魔力やら気やらを全部使ってあいつを殴る！
！だから、ナギお前も一緒にあいつを殴るぞ!!!」

ナギは、驚いた顔で言った。

「剣仁、お前は、それで平気なのか!？」

俺は、真面目な顔で「多分、それがラストチャンスだ!!」
ナギも、覚悟したようだ。

「解ったぜ!!! 行くぞ剣仁!!!」

俺は、右手に魔力と気、憤怒の炎を溜めた。

「いくぜ!! ボルカニック・バースト・アロー改!!!」

俺は、創造主を上には殴り飛ばした。そしてナギが千の雷を纏って創造主を殴り、創造主は、消えていった。

そして、俺は、死んだ。

～ 続く～

最終決戦！！！（後書き）

まだまだ、続きます。

再び神に会って!?(前書き)

少し短いです。

再び神に会って！？

「剣仁サイド」

「うつ　　ここは、どこだ？」目を覚ました俺は、驚いた。

目の前に俺を殺した神がいた。

「ヤッホー、久しいの」剣仁よ」

気軽に話してきた。

「おい、くそ神何でまた、俺がここにいる！？」「俺は、急いで聞いた。

右手で、顎ヒゲを触りながら

「何言つとる？、お前さんが死んだのだろ」

「は　　マジで」

俺は、呆けた顔で言った。

待て！俺いったい何があったけ！？

「回想中」

俺とナギは、創造主を倒した。だが、奴は、最後に俺に向けて魔法を放ったんだ、何時もの俺ならかわせたが全ての力を使った後だから動けなかった。

その後、急いで治療を受けたが、紅き翼とアリシアに見られながら死んだ。

く 回想終了く

「やっぱ、死んだのか俺……」
鬱になった。

「おい、こっちに戻ってこんか」
神がめんどくさそうに言
った。

「しょうがない、
お主には、世話をかけたしな。
特例を認めるか？
どうじゃ、又生き返りたくないか？」
神が訊ねてきた。

俺は、目を見開いて聞いた
「嘘だろ？、待てよ そんなことを出来るのか？ それなら今すぐ生き返せ！！」

「その為には、お主の仮想現実変換能力を返してくれるか？」神が
訊ねてきた。

「良いぜ、でもよ憤怒の炎を使えるようにしてくれ 頼む」
俺は、神に土下座した。

「憤怒の炎か？ まああれならいいか」
神が投げやりに言った。

「ありがとうよ、

神様……！」

俺は、少し泣きながら言った。

「んじゃゝ、行ってこゝい、もう戻って来るなよ」

神が言いながら、俺の足の下に穴を開けた。

「えっゝ、このパターンてまさか!？」 俺は、焦って言った。

舞い戻った、俺！！

くアリシアサイドく

私の目の前に棺桶の中で永遠の眠りにについている、剣仁がいます。

紅き翼の人達からは、勇敢に戦ったと聞いていました。

ですが、私は、剣仁が帰って来ると信じて待つつもりです。

紅き翼の人達の手によって棺桶に蓋を被せられた。

その時、

いきなり棺桶が光輝いて、爆発したのです！？。

「ゴッホ ゴッホ何だこの煙は！？」 この懐かしい声は！

くナギサイドく

俺は、剣仁を見ながら 「すまん、助けられなくて」と言った。

そして、ラカンと詠春の手によって棺桶に蓋を被せられた。その時、いきなり棺桶が光輝いてから爆発した！？。

「ゴッホ ゴッホ 何だこの煙は！？」

ま まさか、この声は！？

く剣仁サイドく

「ゴッホ ゴッホ何だこの煙は！？」 あのかそ神め、またひどい場所に出してくれたな、内心思っていた。

煙が晴れるとそこには、アリシアに紅き翼の面々が驚いた顔で立っていた。

俺は、少し笑って

「ただいま、アリシアそして久しぶりだなナギ」

「「剣仁」!!」

ナギとアリシアが同時に言った。

ラカンは、笑ってるし。

詠春は、驚いたまま硬直していた。

アルは、「バグキャラですね」と言った。

師匠は、いない、やはり…。

「アリシアサイド」

私は、泣きながら剣仁に駆け寄り抱き付いて「どこに、居たのですか？ 心配し
るか？ 心配しました」私は、泣きながら言った。

剣仁も私を抱きしめ「すまん、心配をかけて」と言ってくれました。

「剣仁サイド」

アリシアが俺に抱き付いて「どこに、居たのですか？ 心配しました」て言いながら、泣いた時は、どうしようと考えてアリシア

を抱きしめて「すまん 心配をかけて」何か俺じゃない感じがした
!!。

俺は、ナギ達に振り返り「みんな、心配かけてすまんかった」

ラカン は、いまだに笑っていやがる。

俺は、アルに近付き「アル 師匠は？」と尋ねた。

「ゼクトは……、死にました。」と答えてくれた。

やはりか？ 俺は、無力だと感じていた。

詠春は、硬直したまんまなので、そのままにしておいた。

ナギは、なぜか暗いまんまだ、

アルに訳を聞くと。「アリカ姫が連合に捕まっているのです」

俺は、そういう事かと納得しナギを殴った。

ナギが驚いた顔で俺を見て

「おい!!、 ナギいつま

でも暗いまんまにいるんじゃない!! お前は、お前の正義を貫け

ばいいだろ!!」

ナギは、少し明るくなり「そうだな、ありがとよ、剣仁」

くナギサイドく

俺は、あることを考えてた時、いきなり剣仁が殴ってきた。「おい!!、 ナギいつまでも暗いまんまにいるんじゃない!! お前は、お前の正義を貫けばいいだ!!」

俺は、その言葉を聞き少し元気だ出てきた。

「そうだな、ありがとよ、剣仁」

あいつは、「当然の事をしたまでだ」

カッコつけて言った。

（剣仁サイド）

さて、アリカ姫の方は、2年間は、平気と思う。

その間に、「完全なる世界」の残党狩りに旧世界の紛争を止める事。それにもなって、軍事会社を作る。

旧世界にて（前書き）

多分あと2、3話は、戦闘が少ないと思います。

旧世界にて

く 剣仁サイド く

ただいま、旧世界の砂漠地帯での銃撃戦最中です。 何で
こうなったか？聞きたいっていいぜ、俺が復活？した後 ナギ達と
また、単独行動を取って旧世界のイタリアに行き、俺のマフィアを
作ろうと考え、仲間集めをするために、世界中の紛争地域に飛び回
っているからだ。

そして、今の状況になる。

俺は高台から戦闘の様子を見ながら、欲しい人材を探してる、「はゝ、つまんねゝ、期待外れかな」 双眼鏡片手にため息をついていゝる俺。

30分後

銃撃戦もピークにたつしたのか銃声が激しくなってきた。俺の近くに流れ弾かと思っただが、それから五発ぐらいが俺の近く着弾するから、着弾した弾から弾道を即解析し弾が放たれた方へ双眼鏡を向けた。

そこには、二階建ての家屋の屋上からライフルを俺に向けて構えているガキ？ がいた？？。

「????サイド」

くそ、政府軍と交戦中なのに、何だ？高台からこっちを監視してる奴は、新手の傭兵？それとも増援（敵の）？どっちでもいい早く消えてくれ。

「バカ野郎！！、何無駄だま打ってんだよ！？、訓練道理に打て」
相棒が俺を怒鳴った。

俺は、落ち着き

「ああ、先に政府軍を倒すのが先決だな（お前をこの後撃ち抜いてやる）」

俺は、落ち着いてスコープ越しに敵を見て射っていった。

「剣仁サイド」

あの、ガキ？俺を狙って射たよな？。

「優しいのか？、バカなのか？　まあ話を聞いてみるか」

俺は、戦闘が終わるのを待っていた。

「5時間後」

敵の方は、撤退していた。

俺は、反政府軍のベースキャンプに移動していたら、背後から銃を突き付け、

「動くな！！ 手を頭の後ろに！！ 言うことを効かなければ殺す！！」 少年兵が言ってきた。

「あんたらの総司令に会いに来た、とつと案内しろ」 かつたるそうに言った。

「ベースキャンプ内」

俺は、友人に会う感じで総司令に「よつ、ソーリユウ元気にしてたか？」

周りの民兵は、不思議な顔で総司令を見ていた。

総司令は、あわてていった

「貴様は、何者だ！？、なぜその名を知っている！？」

「おゝい、俺を忘れちゃったのか？、

たく、川に流されそうになった時に助けてやったのに」俺は、残念そうに言った。

ソーリユウの方は、何か思い出した様子で俺を見た。そしていきなり俺に頭を伏せて

「あの時は、ありがとうございます！！」と謝った。

民兵全員が驚いたまま硬直した。

く続くく

新たな仲間！！（前書き）

オリキャラが登場します。

新たな仲間！！

（剣仁サイド）

俺は、何時もの口調で

「なあ、ソーリユウ俺の仲間にならね？」

当の本人は、驚きながら「いつ、いんですか？　でもここで政府軍と戦わないと……」

俺は、呆れながら

「お前は、短期戦は、強いが　長期戦には、弱いだろ。それにここの総司令は、他の奴だろ」

ソーリユウは、目を見開いて

「なぜそれを、知っているのです？」

俺は、即答した

「だって、お前に大隊の指揮は、出来無いから」

ソーリユウは、

「うっ　うっ　確かに俺には、大隊の指揮何かは、下手ですけど泣くソーリユウ。」

キレそうになる俺は、

「何！！ウジウジしてるんだ！！　終わった事を何時までも、引きずるな！！」

ソーリユウは、真面目な顔で「ありがとうございました！！
何か、剣仁殿と話したら吹っ切れました！！」

俺は、内心、ソーリュウが仲間になった事を喜んでいた。

「んじゃ、早速ソーリュウは、イタリアの俺の別荘に行ってくれ、
「待つて下さい！！」それに自分も入れてください！！」…君は、
誰？」

いきなり、声をかけた少年兵は、「自分の名は、ジーク。
この隊では、狙撃手をやっています」

見るからに、10才ぐらいの少年だよな。

「少ね「ジークです！！」ジークなぜ君は、俺らに着いていく」

ジークの顔が暗くなりながら「大切な人を助けるために力が欲しい
からです。」

俺は、その顔を見てジークの過去をさとした。

「そうか、良いだろ、付いてこい。

ソーリュウもそれで良いな！」

「剣仁殿が、良いのならば」

ソーリュウは、笑いながら言う。

「ジ、ジークが行くのなら私も行きます！！」 又謎の少年が声を
上げた。

「えーと？、君の名は？」俺は、聞いてみた。

「はっ はい、私の名は、フィリンと申します。この隊では、観測
手です。これから、よろしくお願いいたします」頭を下げて言った。

「ジークとフィリンは、狙撃のバーディーです、それとフィリンは、女の子ですので」ソーリュウが耳打ちしてきた。

「んじゃ、後の2人も、ソーリュウと一緒にイタリアに行つてて」俺は、言った。

ソーリュウは、不思議そうに「剣仁殿は、どうするのですか？」

俺は、気楽に「仲間集めをまだ続けるんだが」

「そうですか、まあ剣仁殿なら平気ですね、ああそれと、その組織の名は、何ですか？」ソーリュウは、少し笑いながら言う。

「組織の名は、ダーク・ウルフハンズそれが名だ」俺は、そう言うとその場を去った。

キャラ設定（前書き）

新キャラの説明をします。

キャラ設定

名前：ソーリユウ

36才

性格：任務中は、常に冷静

沈着。だが、任務外は、優しい。

容姿：カーリニング（フルメタル・パニック）の日焼けバージョン

愛銃：コルト・ガバメントM1191A1

「戦場の支配者」と、呼ばれてる

名前：ジーク

10才

性格：常に冷静沈着なため周りとは、関わらない。

容姿：サガラの銀髪バージョン

愛銃：ドラグノフ（狙撃銃）

ウージー

「冷鉄なる弾丸」と後に呼ばれる。

名前：フィリン

7才

性格：基本的に優しい。ジークと居ると甘える。

容姿：マオの銀髪バージョン

愛銃：M4A1

シグP220

「鷹の目」と後に呼ばれる

謎の剣豪 上 !? (前書き)

上下に別れます

謎の剣豪 上 ！？

「剣仁サイド」

「ヤッホー、あゝ空気が美味しい」

えっ、俺が今どこにいるかだつて？。

フッフッフ、この場所は、旧世界のとある山奥に位置するところだ。

何で、ここに居るかだつて？ ある噂で最強の剣豪が居ると聞いたから、来てみたんだ。

「あゝ アチいゝ、何時間歩いてる俺？」
ヤル気な下げに言つた。

「？？？サイド」

私は、いつも道理山道を走っていると

「あゝ アチいゝ、何時間動いてる俺？」 いきなり声が聞こえて戸惑いました。何しろ、師匠以外の人に会つたのが久しぶりだからです。

遠くから見張ることにしました。

「剣仁サイド」

俺は、暑い、暑い言いながら歩いてた。

「どのぐらいで、つくんだ。（たく、なんだか、この下手な見張り

かたは）
言いながら、内心違うことを考える俺。
少し驚かせるか。

「????サイド」

あの人が、いきなり手から炎が吹き出てるのです!?!。
「えっ、何であの人も炎を出せるの!?!」

謎の人が炎を手から吹き出てるのです。

「ウソ…、師匠と私以外に炎を灯せる人が居るなんて」
私は、戸惑って謎の人を見失いました。
辺りを見回しましたが誰もいません。

背後からいきなり

「やゝあゝ、こんにちは」

「剣仁サイド」

俺は、謎の子に背後から迫って一声かけた「や゠あゝ、こんにちは」
たく何で、こんな幼い子が俺を見張ってたんだ?。

謎の子は、ゆっくり後ろに体を回した。「あなたは、何者です。
どうやって私の背後に」

俺は、「死ぬ気の炎での高速移動だが、君にも出来るだろ」これ

は、直感で感じたことだ。

く続くく

謎の剣豪！？ 2

「剣仁義サイド」

謎の子が驚きつつ、「あなたは、なぜそれを知っているのですか？」と問い掛けてきた。

「逆に聞くが、君以外にも炎を灯せるとは、考えなかったのか」俺は、めんどくさそうに言った。

謎の子は、慌てながら「そっ そんなこと有るわけがありません！ 父上は、私たち以外は、使えないと言っていました！！」

俺は、不信に思い「父上て誰だ？」と謎の子に聞いてみた。

「父上は、父上です！！」とさりりと言った。

俺は、面倒だと思いながら「それじゃ、君の名を教えてくださいませんか？ それと、この辺に最強の剣豪が居るって聞いたんだが？」

謎の子は、

「あっ はい 時雨蒼燕流 9代目当主

滝浪 神無「たきざわ かな」でございます」

丁寧と言った。

俺は、目を見開いて「そ　それじゃ、君が現最強の剣豪なのか？」

滝浪は、「はい、多分最強の剣豪は、私です」

俺は、内心かなり驚いてる。　何しろ、パツと見フィリンと同年に見えるからだ。俺は、あまりの事にフリーズしてしまった。

神無は、俺がフリーズしたのを困ったように見て、俺の顔の前で「大丈夫ですか」と聞いたり、手を振ったりしていると俺は、気がついた。

焦って聞いた「君「神無です！！」神無の父親は、今どこに居る？」

神無は、地を見ながら「父上は、半年他界しました。」

俺は、しまった。と感じた。

「あつ　平気ですよ！！」神無は、笑いながら言った。

「すまん　辛い過去を思い出させてしまって。　なあ　俺に付いてこないか？」

俺は、謝りつつ神無を組織に誘ってみた。

神無は、難しい顔をして「良いのですか？ 私なんかで…」と
言いながら俺を見た。

俺は、胸を叩きながら「任せとけ、子供の1人増えたって関係無いから」

神無は、「あっ ありがとうございます」と礼儀正しく言った。

「んじゃ 俺の組織に行くか」

「あのー その組織は、どこにあるのですか？」

「あー 組織の場所ね イタリアにあるよ」俺は、さらりと言った。

「へっ イタリアですか？ 遠い所に作りましたね でも何の理由があってイタリアなのですか？」

「イタリアと言えば、マフィアでしょう。」

俺の理想だからだ！」

俺は、神無を横に抱き 「んじゃ 組織のメンバーに会いに行きま
すか」と言つて。

飛んでいった。

謎の剣豪！？ 2（後書き）

次は、組織のメンバーと顔合わせをします。

ダーク・ウルフハンズとの顔合わせ！？

「剣仁サイド」

ふう〜、疲れた。

何で疲れたかって、そりゃ神無を横に抱いたまま、山越をしたからだ。

意外に山越が大変でな、頂上辺りで高山病になりかけたり、その間熊に追い掛けられたり…、さんざんな1日かと思ったが、神無という剣豪が仲間に入って疲れが吹き飛んだぜ。

んで、今は、イタリアのベネチアの近くだぜい！！

えっ、どうやってイタリアに来たって？ それは、聞かないで…。

気を取り直して、俺は、神無に「ダーク・ウルフハンズ」の概要を説明しながら基地に向かっている。

「だからなあ〜、俺らは、護衛、警備、調査、戦争請け負い、運び屋、なんかをするんだよ！！」

「そのぐらい、解ります。 ですが戦争請け負いは、反対です！
！」

俺は、頭痛がしてきた。

「んじゃーよ、中立的立場や第3戦力なら良いか？」

神無は、奮えながら「どっちも同じですよね！！！」

「解った！！ 君は、戦争の介入じゃなくて護衛関係の部門に入れるよ！！！」

「そ それなら、良いですよ」

「さあ 着いた、ここが「ダーク・ウルフハンズ」の本拠地だ！！」

「！！！！ で ですかいですね、なんか建物が古いですね」

「そりゃー、元マフィアのパーティー会場だからな 綺麗に使ってたんだろ」

えっ もらった理由教え無いよ。

「まっ、外見は古いが内部は最新設備で埋め尽くされてるぞ」

俺は、門を通り抜けて扉を開けた。

「全員、隊長に敬礼」

ソーリユウを先頭に後の方に100人位が俺に敬礼をしていた。

「ソーリユウ、これは、一体なんだ？」

「はっ！！ 隊長が来るの察知したため、敬礼で出迎えたまでです」

面倒だな

「ご苦労、私が君らの隊長であり、ダーク・ウルフハンズのボスだ
！！！」

ほとんどの兵士は、戸惑っている。

「黙れ」俺は、殺気を放ちながら言った。

「諸君らは、いくつもの戦場を渡り歩いた戦士だ！！ だか我々の仕事は、戦争の介入、鎮圧等だ 犠牲を最小限に成果を最大限に出来るのが俺たちだ！！
俺に続くか？」

戦士達は、

「「「隊長に続け（きます）！！！！」」」

「行くぞ、ダーク・ウルフハンズの戦場に！！！！」

「「「サー イエッサー！！！！」」」

）
続
く
）

ダーク・ウルフハンスとの顔合わせ！？（後書き）

次号は、アリカ姫編まで飛びます。

救出編！？

1

ダーク・ウルフハンズとの顔合わせ
アリカ姫の処刑宣告から2年後：

（剣仁サイド）

俺は、ナギ達が居る魔法世界の隠れ家に向かっていた。

「ナギは、まだ決心がつかないのですか？」

「ナギにとっては、大変な決断だからな」

「ぶっ叩いて、目を覚まさせるか」

アル、詠春、ラカンらが話していると

「じゃまするぜ」

陽気な声で言いながら扉が吹き飛んだ。

「誰^{です}（なんだ）（だ）」「」

「よっ 久しぶりだなお前ら」 笑いながら言った。

「「「剣仁!?!」」」

「今まで、どこにいた?」

詠春が抱き着きそうになり殴って気絶させた。

「アル、ナギは、今どこに居る」

「ナギなら隣の部屋に居ますが」

俺は、隣の部屋の扉を蹴り飛ばした。

「おい ナギ アリカ姫助けに行かないのか」

「……………」

「ナギ 黙ってたって意味がない、お前は、アリカ姫の事が好きじゃないのか。」

一度惚れた、女を見捨てるのか」

「剣仁、聞いて良いか?」

「何をだ？」

「お前の言う正義ってなんだ？」

「正義って、お前曖昧あいまいな言葉を使うな。

まあ、正義って言葉には、人それぞれの正義があるな、例えば悪が正義って言う奴も要るしな。

ナギ、自分の信じる正義を貫けよ」

「……………」

「ナギ、姫さんを助けんだろ！！
お前の覚悟は、そんな程度か！！」

「ありがとよ、剣仁」

ナギの目に闘志が灯った。

「行くぜ、お前ら！！！！」

「やっと決まりましたか」

「決心がついたか」

「はっ！！」

「やっとか！！」

上から、アル、詠春、ラカンの順に言った。

く続くく

救出編！？

2

今俺は、処刑所「ケルベラス溪谷」より1・5キロ地点の丘から姫さんが谷に落ちるのを俺、アル、詠春、ガトウらで待っていた。

「アル、転移魔法の方は、準備出来たか」

「ええ、何時でも行けますよ。」

ですが、その格好は、何ですか？」

俺の今の格好は、旧世界の特殊部隊の格好をしている。

「これか？」

俺の場合は、訳有りだな」

「アル、アリカ姫が落ちた行くぞ」

このワイルドな親父はガトウと言う名だ、本名は、知らない。

俺は、腰を上げながら

「ナギ、姫さんを助けるよ」

と呟いた。

く処刑所

「よろし「よおーし、こんなもんだろ」なっ」

「撮れたか？撮ったな？ご苦労さん オーイ オッサン これ生中
継とかねえよな？」

「無礼者！！」

何者だ貴様 名を」

「オッサン

録画はここで終わりだ で 今からここで起こることは『なか
った』ことになる」

「きつ 貴様は！」

鎧が吹き飛び現れたのが。

「せ 千の刃の

ジジャ ジャックラカン！？！」

「もう少し静かにやれラカン」

「青山 詠春！」

「アルビレオ・イマ！！」

なっ ガ ガトウ！！まで」

「俺を忘れちゃ困るな」ボスらしい奴の目の前でECMを解いた。

「なっ 斎藤 剣仁まで!!」

「紅き翼 馬鹿なッ では谷底の女王は」

「ぐ 捕らえよ反逆者だ!!!
谷底の二人も逃がすな!!」

「やるつてのか? 爺そんな数で」

「フフ その程度の戦力だと? 愚か者が このイベントの警備は ここに見えるだけではない

周囲数十キロ

二個艦隊と三千名の精鋭部隊が包囲している いくら貴様らでもこれを」

「アアア、それがどうした」

「だな その程度の戦力でいいのか」

ベキベキ ゴキンッ
ガシャッ ガチッ

ラカンは、指を鳴らし　俺は、愛銃に死ぬ気弾を装填した。
「なっ　何!?!」

「んじゃ、行くぜ!?!」

ドカッ!?!

俺は、得意の高速移動で移動しながら銃を乱射した。

ガンガンガンガン

ドカッ!?!?!?!

俺ら、紅き翼は、手加減無しにやるもんだから、そこら辺に気絶した奴や戦艦の残骸なんかが落ちていた。

俺は、一息つきながら谷の方を見ると、夕焼けを後ろにナギとアリカ姫がキスの最中だった。

「イイネエ」、

あの二人は、やっぱり絵になるぜ」

独り言を呟いた。

～戦闘後～

ガトウの交渉により今回の件は、無かったことになった。

その後俺の提案によって旧世界の日本の詠春の家に行くことになった。

～続く～

京都での悲劇?? (前書き)

少し長い文章です。

京都での悲劇？

く旧世界 京都 く 紅き翼のメンバー全員＋アリカ姫・アスナ姫
とで京都の町を歩きながら詠春の家に向かっていた。

「詠春くまだつかないのか？」

「五月蠅いぞ、ラカン黙ってる」

俺は、久しぶりの日本に喜んでいるのによ。

てか、何でアスナが居るんだ？ しかもなつかれてるし。

「ケンジ お腹減った」

上目遣いで俺を見るな。

アリシア秘伝の技を使うか。

屈んで目線をアスナと同じにして。

「アスナちゃん もう少し我慢できる？」

「我慢できる」

「よし、いい子だ」

俺は、アスナの頭を撫でた。

「ツウ　　／／／」

「子供の扱いが上手いですね、私にもその技を教えてください」

アルがふざけたことを言い出した。

「アル、誰がお前何かに教えるか！！」

ガチツヤ　ガンガン

俺は、アルに銃を向けて引き金を引いた。

「アル　　テメーかわすな！！」

「嫌です　　まだ死にたくないの」

「ガッハハハハ！！！」

ラカンがまた笑っていやがる。

「五月蠅いぞ、ラカン！！」

「いやゝ、オメゝラ本当に面白いからよついな」

「五月蠅いぞ、お前ら少しは、黙っている!!!!」

まあ、確かにこれは、五月蠅すぎだな。なにしろ、格好がな、ラカンなんて上半身ジャケットを着てるだけだし

アルは、深くフードを被ってるし

ナギとアリカ姫は、イチャツイてるしよ

まともなのが、俺に詠春 アスナだけだ、周りの視線が嫌だ。

「詠春、あれなんとかして、周りの視線が嫌だよ」

「平気です。認識阻害を使ってますので、周りからは、騒がしい外国人の集団と思われてるだけですから」

アルが言った。

「詠春 早くお前んちに行こう、頭が痛くなってきた」

「そうだな、早く行こう」

「詠春の家」

俺らは、飯を食い終わった位に巫さんみたくのが慌てて入ってきた。

「え 詠春様 大変です!!!!」

スス スクナの封印が解けそうです!!!!」

「なっ何!!!!??」

詠春が慌てて立ち上がって駆け出していった。

ドタドタドタドタ

俺は、酒を飲みながら五月蠅いなと考えていた。

ドタドタドタドタ

バシッ

走って来て襖を勢いよく開けて、言った。

「悪い、みんな手伝ってくれ!!!
このとうり!!!」

土下座をする詠春

「何が合ったんだ詠春」 俺は、面倒事だと思いながら聞いた。

「スクナと言う鬼神の封印が解けたんだ、暴れ出す前に倒さないと...」

俺は、ナギ達任せかと考え策を練った。

「詠春、そのスクナって強いんだろう？」

ナギとラカンが反応した。

「ああ、強いが、それがどうした？」

ナギとラカンが立ち上がった。

「よっしゃ、行くぞ詠春・ラカン!!」

「そうだな、ナギ!!」

二人は、詠春を掴んで出ていった。

二時間後

ぼろぼろになりながら帰って来た四人？

「アル、お前いつの間に行ってた？」

「え、最初から行ってました。それで、傍観していました」

「そっか、んじゃ俺は、帰るわ。
じゃ〜な〜、アスナを宜しく」

俺は、そのまま高速移動をして消えた。

〜続く〜

京都での悲劇??（後書き）

次号は、ネギが担任になって少しした頃です。

会社全体の解説

構成人数：3000人

（非戦闘員1000人）

陸上兵器

戦車：5台（M1エイブラムズ）

装甲車：10台
ストライカー

車両：10台
ハンビー

海上兵器

駆逐艦：4隻（通称：オマージュ、ライトニング、コルベット、デ
ストロイヤー）

輸送船：2隻（通称：プライス、メーリング）

潜水艦：2隻（通称：シーラ、ファントム）

航空兵器

輸送機：3機（C - 130）

輸送ヘリ：14機（CH - 47 5機、UH - 60 4機、UH - 14 4機）

攻撃ヘリ：10機（AH - 1S 5機、AH - 64D 5機）

観測ヘリ：2機（OH - 1 2機）

特殊武器

パワードスーツ

（アイアンマンのに似ている）

多脚砲台

（サソリがモチーフ）

F - 35（アメリカから試験的に渡された）

V - 2（アメリカから試験的に渡された）

レールガン（自社で作った物）

人工衛星（自社で作った物。主に監視、たまに破壊活動をする）

など、また変わると思う。

会社全体の解説（後書き）

次号は、ネギが担任になって少しした頃です。

麻帆良学園に向かう（前書き）

麻帆良学園に向かう

＼ＤＵ 社長室 ｝

カタカタカタ

「ハア、そろそろ休まねえ」

パソコンに情報を打ちながらカッタルそうに言う、だらしない社長。

「ダメです。始末書や報告書に目をとうしてください、全部ですよ全部！！！」 しつこく言う美人秘書。

「他の奴に任せれば良いじゃん？」

窓の外を眺めながら言った。

「何言ってるのですか！？ 社長が目をとつすものばかりです！！」

社長 社長言われてる人物は、紅き翼の一人・ＤＨの創設者

齊藤 剣仁だ。

美人秘書は、ジークの相棒のフィリン 今は、訳あって療養中（書類の整理など剣仁のバックアップが主）

「知ってますか？ 社長、会社全体の人数を？」

「どんくらい居るんだ今」

「3000人です 3000人！！！」
怒りながら言うな。

「あー、解った 解った休憩だ一時休憩」

「解りました。飲み物と軽食を持ってきます」

ガチャ スタスタ

「ふっ、行ったかそろそろ計画を実行するか。弟子の頼みでもあるからな」

言いつつ、机の引き出しから一つの封筒を取り出した。

「あつ、置き手紙してこ、え」と《ちよつと遊びに行くわ、絶対に探すなよ》これでよし」

俺は、本棚に近づき本を一冊押した。
すると本棚が左に動き部屋が現れた。

「フッフフン、俺の相棒と」

鼻歌を歌いながら、荷作りを始めた。

「ここは、MP5、M14、FA-MAS、G3 SG/1かなあ
つ、後SIG P200、Mk23だなおし、行くか」

俺は、荷物を持ち地下駐車場に向かった。

フィリンが部屋に入りながら

「すいません、社長遅れてし…、居ないどこに、まさかまた脱走！
！！」

慌てて部屋を飛び出した。

↓地下駐車場↓

「ふう、疲れた。

あつ居た居た、オヤッサン、俺の車のキ

ーを返してくれ」

通称オヤッサンこの車の監視役であり良き酒友達だ。

「おう、社長じゃねーか、また脱走か？」

笑いながら話かける。

「まっ、そんな感じ、それよりも、早く俺の車キーを返してくれ」

「えーと、合った 合った。これだろ」

「おっ、サンキュー恩に着るぜ」

俺は、急いで、車に近寄りカバーを取った。

そこに在るのは

「いつ觀ても良いぜ」

俺専用の黒塗りのハンビーだった。

部隊で使ってたのお、俺が回収し黒く塗った。（元が軍用だから頑丈、改造して燃費・運転性能を高めた）

「さて、さっさと逃げますか」

ガチャ

ブロロロロロロ

「いました、繰り返す。社長がいました」

「げっ、もう見つかった。まあいつか」と言いながら、車を猛ス

ピードで発進させた。

「ゲートを閉めろ、何コードが違っだど！！！」
警備員が叫んだ。

「コード入力は、もつと難しくしとく様にフィリンに言っどけ」
メガホンを使いながら言った。

「又逃げられた！」 疲れはてた顔で逃げた方を眺めた。

「車内」
「よう、し、脱出成功！！」
「！！」
後は、麻帆良学園へ向かうだけだ

車内で、騒ぐ俺だった。

）
続
く
）

麻帆良学園に向かう（後書き）

ネギに会うまでの十年間は、ストーリーに組み込みます

麻帆良にて

「麻帆良学園付近」

「来たには、いいけどどうやって入ろう？」
車内で一人考える俺

「ん、弟子に連絡するか」

俺は助席に置いてあるカバンから、携帯を取り出した。

ピッピッ

「久しぶりだな、タカミチ元気だったか？」
を観させてもらった。

お前からの依頼書

俺直々にやるから、先方に言っというて、んじゃまた後で」

俺は、携帯を切っても助席に放り投げた。

「さて、ここの警備体制は、どのぐらいかな」
少し笑いながら言った。

「麻帆良学園の一角」

「タカミチ君、それは、本当かね？」

あの炎神と言われた彼が来るのは」

一人の人物が言った。

「ええ、多分あの人は、本気ですよ」

どこかガトウに似た感じを放つ人が昔を思い出す様に言った。

「ふむ、ワシは、彼をネギ君のクラスに入れようと思っがどうじゃ」

「多分、平気だと… 思います」

「ふむ、ではネギ君の副担任と言うことでよろう」

二人は、暗闇の中で不穏な話をしていた。

「次の日」

俺は、昨日とった、ホテルで一夜を過ごし朝飯を食べ、グレーのス

ーツに袖をとうした。

「フアゝ、久しぶりこんなの着たな」

俺は、スーツの襟をただしながら言った。

「げっ、もうこんな時間か！！　　急がねーと！！！」

俺は、ロビーでチェックアウトしキーをもらった。

ガチャ　ドン

ブロロロロロロ

俺は、急いで車を発進させた。

ゝ麻帆良学園の学院長室ゝ

「タカミチ君、ちーと遅くないか」

「ははは、いつものことですよ」

コンコン

「失礼します。副担任の方をお連れしました」

「ふむ、すまんのゝしずな先生」

「よつ、タカミチ久しぶりだな。」

「んで、あの妖怪もどきの爺がお前の言ってたやつか」

「ははは、まあそうですね、本当に久しぶりですね、何年ぶりですかね」

「タカミチ 旧交を喜ぶのは、ここまでだ、これからの話は、仕事のだ、いいな」

「ええ では、自己紹介から今椅子に座っているのがこの学園長であり魔法会の方で理事長をやっている「近衛 じゃわ」という感じですよ」

「んで、爺、ここでする他の仕事って何だ」

「ふむ、それについては、まず広域指導員、夜の警備、そしてあるクラスの副担任じゃ」

「俺は、煙草をくわえて考えて居た」

「OKあと、爺 俺の部屋は、どこだ？ それとハンビーー3台分」

の駐車をくれ」

「ふむ、解った手配しよう。
してこれから来る先生は、千の「ナギの息子だろ」…知ってたの
か」

「ああ、知ってたよ。 それと俺が紅き翼のメンバーって言
うなよ」

「なぜじゃ」

「自分で探さないと意味ねーだろ」

「フオフオフオ 解ったぞ」

コンコン

「失礼します。
ネギ・スプリングフィールドですけど」

「おー、ネギ君入りなさい」

「あつ、はい」

「まずは、自己紹介じゃなタカミチ君の隣にるのが、「斎藤 剣仁だ、よろしく」彼は、君のクラスの副担任となるのじゃ」

「あつはい、解りました。さい「剣仁で良いよ」剣仁先生これから、お願いします」

俺は、ネギ君と会った時ナギに似ていると思ったが、ネギ君の礼儀正しさに面食らった。

く 2 - A 入り口く

「ここが、僕達が、担任をするクラスです。 先に行くので呼んだら入ってください」

「ああ、解ったよ」

俺は、外からクラスの中を眺めて一言言った。
「騒がしいクラスだな」

「皆さん、席に座ってください。
新しい先生が来たので自己紹介をしたいと思います。
入ってください」

「ぬぬ、私の情報網に引つ掛からないでどんな人物だろ？」カメラ
を持ったまま頭を抱えていた。

「朝倉、大丈夫」

「「楓」 新しい人ってどんな人だろ」」 双子が細目の子に
聞いた。

「ふむ、どんな人でござるかな」

「強いアルかな」
小柄で元気な子が言った。

ガラガラ

教卓の前に立ち

「こんにちは、2・A組の皆さん。今日からこのクラスの副担任に
なる、斎藤 剣仁でだ。
以後よろしく」

「カッ」「カッ」「カッ」「カッ」

「カッ」

カッて、が何だ？

間を置き

「カッ」「カッ」「カッ」「カッ」「カッ」

突然の大音量に俺の鼓膜が揺さぶられた。その上行きなりの質問攻め。

「先生つて、今何歳何ですか？」

「先生の身長と体重は、「ちょっとまってここは、麻帆良パパラチの朝倉がみんなの代表で質問するわ」朝倉じゃやって」

「俺もそうしてくれた方が楽だ」

「んじゃ、先生の年・身長・体重を教えて」

「年は、24歳（不老のおかげで）、身長は、180cm、体重は、最近で80キロ位だな」

「先生の趣味・特技・現在彼女有いですか？」

「趣味は、料理や武術、読書何かだな。特技は、バイクやＡＴＶなんかで、アクロが出来るな。彼女は、…いるぞ」最後の方で声が小さくなった。

何人かの生徒が武術と言ったら反応したよな。

「これで、質問タイムは、終わりだ。早く席に座れ」

「「「「「え〜」」」」」

「良いから、席に座れ」

その後の授業は、無事に終わった。

「放課後」

「ハア〜、何であんなに元気なんだ？」俺は、俺用のバイクを押しながら愚痴っていると、前方に男３人で囲みながらナンパするのが見えた。しかも、男が殴ろうと腕を上げた時に大河内の顔が見えた。俺は、無我夢中で殴ろうとした男を飛び蹴りのえじきにした。

「大丈夫か、大河内、和泉少し離れて待ってる」

「「はっ はい！！」」

男は、ボクシングの構えをし後の二人をボコシタ。

「ありがとうございます。先生」

大河内が俺に礼を言ってきた。

「まあ、当然の事をしたまでだそれより、和泉、お前は、平気か」

「あつ はい平気です」 何しろ一番の被害者だからな。

「んじゃ、俺は、これで」

「待って下さい。」

これを運ぶのを手伝ってください」

「ん 解ったよ、それでこれをどこに運べば良いんだ？ 大河内」

「あつ 教室に持って行けば良いです」

「解った。よつと」 けっこう重いなこの荷物。二人の荷物を全部持つ俺。

「持ちま「平気 平気このぐらいなれてるから」わ 解りました」

その後、和泉と大河内からアドレスを交換した。俺は、和泉にフラグが立って事に浮かれていた。

＼ 2 - A 扉前 ＼

俺は、和泉達と荷物を運ぶのを手伝って教室まで来たが、中から怪しげな音がするのは、勘違いだよな…。

「先生 さっ入ろう」和泉が俺の背中を押して教室の中に入れた。

覚悟を決めた俺は、扉を開けると

パン パン

クラッカーの音が鳴った。

「何だこれ？」

頭の上にクラッカーの紙なんがどっさり降りかかった。

「剣仁先生の歓迎会ですよ」

「あれ、タカミチいつの間に居た？」

「ハハハ、酷いですね」

「あつ、剣仁先生、こつちです」

ネギ君が、腕をふって、呼んだ。

「ネギ君、まさか酒を飲んだか？」

ネギ君の顔が赤くなり、酒の匂いがする。

「ふえ、平気ですよ」

「まつ、俺も酒でも飲むか」
懐からウオツカなどを出して飲んでいた。

〳 一時間後〵

俺は、学園長に手配させた部屋に危うい足取りで向かっていた。
「ふう、そろそろ出てきたらどうだ」

「いつ解った？」

そこに居たのは、長身の褐色肌の真名が居た。

「勘だ 勘」

「そうか、本当に不思議な人だな」

「んじやな、俺は、眠いから」

俺は、酔いながら部屋に向かっていた。

〳 続く〵

エヴァと会って!?

とある部屋??

うつすらと日の光がカーテンの間からさしてきた。

「ん、頭が、あれここは、どこだ」

俺は、掛けてあった毛布をどかした。

するとそこに居た、人物を見て俺は、固まった。

「ん、おはよう、先生、早い目覚めだな」

隣にいる人物が起きながら言う。

「真名、何で俺のYシャツを着て、俺の所で隣で寝ていた」

俺は、昨日真名に会った後の記憶が思い出せないでいた。

「あの後、タカミチ先生が来て部屋の事を話して消えたら、先生が寝てしまつて私が運んだんだろ」

「そうなのか、ありがとうな真名」

俺は、真名の頭を撫でた。

「／／／　ふ普通の事をしたまでだ」

顔が紅いぞ、顔が。

「で、もうひとつ何で俺のYシャツを着ている」

「ああ、これかなんとか着たまでだ。それとも、は「もう良

いから!!!それ以上言うな!!!」　　「フッ　解ったよ」

たく何時からこんな性格になった。

「なあ、真名この部屋は、どこにあるんだ？」
俺は、朝ごはんを作りながら聞いた。

「ここは、女子寮の管理人室だが」
真名は、制服に着替えながら言う。

「はっ……、なんじゃそりゃー!!!!」
「まあ、頑張ることだな、先生」

その後は、朝ごはんを食べて学校に行かせた。

く 昼休み 屋上

「フアゝ、寝みゝ」 えっ、午前中の授業、全部バクレタヨ。
「眠そうですね、剣仁さん」

「ん、タカミチか、なんか、ようか？」

「ええ、今日の午後12時に世界樹前の広場に来てください」

「メンドー、てかそれってこの学園に居る、魔法教師・生徒への紹介だろ」

「ハハハ、ばれま「エヴァを呼んでおけ」はっ」

「だから、エヴァを呼んでおけ」
仰向けになりながら言った。

「は はあ」

俺は、それっきり寝た。

「夜 12時 世界樹前の広場」

俺は、本社の研究班が作った。試作電磁迷彩服を使って20分前から待っていた。

「眠い」

俺は、あくびを噛み殺していた。

「学園長、今日来る警備員は、強いのですか？　生半可な奴は、要りませんから」

何だ、あの肌黒野郎殺すか？

「フオツフオツ、平気じゃよ君らでも知っているはずじゃ」

「はっ！！　私を呼んだんだから面白い奴だろうな、爺」
金髪幼女が爺に起こっている。

俺は、金髪幼女の後ろに移動してから電磁迷彩の電源を止めて抱き上げた。

「「「なっ……！！」」」

周りの先生が俺の突然の登場に驚いてた。

「誰だ、貴様　離せ……！！」」
金髪幼女が暴れたした。

「ヒッデゥ、久しぶりの再会なのに、だろエヴァ」
俺は、懐かしさに喜んでいた。

「まさか、お前は、ケンジか！？」

「やっと気付いたのかよ」

「フオッフオツ、いつの間に居たのじゃ？」

「まあ、良いじゃねーか。それよりも、とつとと俺を紹介しとけ」

「なつ、き貴様！！ 学園長に対してどういう接し方だ！！」肌黒
うっさい。

「まあまあ、そこまでじゃよ。 彼の名は、斎藤 剣仁じゃよ
二つ名は、炎神じゃがな」

「あの紅き翼の！？」

「炎の殺し屋！？」

「まあ、そんなもんだな」

俺は、いまだにエヴァを抱き上げたままだ。

「フオッフオツ では、力試してタカミ「多分殺すぞ」なしじゃの」
爺ビビってないか。

「あの炎神殿、一つ聞いて良いですか」

「なんだ？」

俺は、肌黒野郎の方を向いた。

「あなたは、 立派な魔法使い のはず、なぜ 闇の福音 を殺さ
ないのですか？」

「…テメエ、立派な魔法使いを目指してるんだよな、ならもし自分の家族が吸血鬼なんかになったら、自分の手で殺せるか？」

「それは…」

「覚悟は、有るのか無いのかどっちだ！」

「……」

「結局きまんか　ザコが、爺　俺は、帰るぞ」
俺は、エヴァを抱き上げたまま移動した。

「エヴァ宅」

「さあ、聞かせてもらうぞ！！　　サウザンド・マスターは、生きているのか」

エヴァは、俺の襟を掴んで聞く。

「あの馬鹿ナギが死ぬわけないだろ」
俺は、エヴァを落ち着かせながら言った。

「なら、ケンジ　貴様が私の呪いを解け」
「解った、解くから座れ」

「へっ、お前にこの呪いを解けるのか」

「解けるが、それがどうした」

「今す「はい、これ飲んでね」ング」俺は、一緒に持つてきといたケースの中から、緑色の液体が入った試験管をエヴァの口に流し込んだ。

「ゴボゴボ ハアハア 一体何を飲ませた！！！」
咳き込みながら言う。

「あれね、俺が作った解除薬だが、エヴァ体に魔力がみなぎるだろ」

「何！？ フツハハハ魔力が魔力が戻ったぞ！！！！」

「大丈夫ですかマスター？」

「平気だ、それよりも酒の用意をしろ、茶々丸」

「判りました、剣仁せん「剣仁で良いから」剣仁さんのものですか」

「もちろん要るだろケンジ」

エヴァの顔が恐い。

「解ったよ、俺も飲むよ」

渋々飲む俺。

その夜は、多分一生の思い出になっただろう。

）
続
く
）

エヴァと会って!?(後書き)

次号は京都へんです

修学旅行 1日目

「フア、寝みい」

昨日夜中まで俺は、荷物や装備の準備のせいで寝不足状態でした。

「なに、眠そうにしてるんだ」

エヴァが聞いてきた。

「あのな、爺から、面倒な依頼が在るんだよ」

「どういつ、仕事だ」

俺は、内心エヴァなら教えても良いかと思った

「関西からのイヤガラを出来るだけ防ぐ事」

「面倒な事だな」

「「「キヤー」」」

俺は、悲鳴が聞こえた方を向いた。

「「カエル（だな）」」

俺とエヴァは、少し固まっていた。

「エヴァ、じゃあなー」

俺は、その場を急いで離れた。

「フー、これは、本当に面倒だな」

俺は、少し離れたところに居た。

「先生、なぜここに」

「よう、桜咲」

「待ってくださーい」ネギの声が聞こえた。

「次は、なんだ…、ツバメ？」
しかも、親書持つてるし。

「本当に俺を起こらせたいのか
バメを鷲掴みした。

フン」俺は、喋りながら、ツ

「桜咲、これをネギに」

俺は、親書を桜咲に投げた。

「はっはい!!」

俺は、その場を離れた。

く清水寺く

「高いアルナ」

「誰か落ちないかな」

「拙者がいつてくるでござる」

「お前ら、待てー！！」

何このハイテンション！？

まじ疲れる。

「フツ、おいケンジ」

エヴァが呼ぶ。

「なんだ？」

「あれを見ている」

「はっ？」

俺は、エヴァが指した方を見た。

すると、何人かが落とし穴に落ちていた。

「俺は、もう手を出さないぞ」

俺は、エヴァとその場を離れた。

（旅館）

どうやら、あの後酒入りの水を飲んで、クラスの半分ぐらいが寝てしまったようだ。

「フー、疲れた」 俺は、一人屋上で酒を飲んでいた。

「ストレス溜まってヤダナー」

愚痴っていると、お姫様抱っこされた、このかを見つけた。
俺は、その後を付いていった。

「チィ、どこに行きやがった」

俺は、憤怒の炎を両手に灯し、ながら、飛んでいた。

すると、前方の駅から聞きなれた声が聞こえた。

「見つけたぞ!!!」

俺は、憤怒の炎の出力を上げた。

（駅内）

俺が着いた時は、術師の声が聞こえた。

「…そやな、まずは、呪薬と呪符でも使こうて、口を利けんようにして、上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな…」

俺は、その言葉を聞き何かが壊れる音がした。そしてただ一言。
「殺ス」

<アスナサイド>

「ここのかをどうするつもりなのよ…」
猿に捕まりながら言う。

「…そやなく、まずは、呪薬と呪符でも使こうて、口を利けんようにして、上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな…」

「いい度胸ダナ、オンナ」

聞いた、事のある声が聞こえてきた。

<剣仁サイド>

「いい度胸ダナ、オンナ」

俺は、殺気を放ちながら上から降りてきた。

ネギ達は、俺を見て驚いていた。

「お前らは、離れている」

俺は、感情の無い声で呟いた。

俺は、術師のオンナに銃口を向けていた。

「んなつ！！ この嬢ちゃんに当たりマッセー！！」
慌てる術師のオンナ。

「平気だ、俺は、狙ったものは、外さない」

俺は、デザートイーグルを構えてると、

「石の槍」

突然、俺の右腕と左足に石の槍を貫通してきた。

「やあ、炎神」

白髪の少年が現れた。

「よう、フェイト俺を殺しに来たのか？」

俺は、自分の身体を炎化させて石の槍を抜いた。

「いや、今日のところは、帰るよ」

「誰が、帰すか」

俺は、決別の一撃を放った。

煙が晴れるが、そこには、誰も居なかった。

「ちっ、転移魔法か」

俺は、近衛を抱き上げてネギ達のもとに向かった。

<ネギサイド>

「何で、剣仁先生がここに居るの!? それに身体から炎が出てたし!?!」

アスナは、騒がしく言う。

「そうですよ!?!? 何で、ここに居るんですか!?!」
ネギは、アスナと同じ事を聞いてきた。

「落ち着いてくれないか? 話せないんだが」

「「はい」」

「身体から炎が出てきたのは、俺の固有能力の発展方だ」

「「発展方だ??」」

「そうだ、まあこの続きは、また今度な」

「納得、いかない」

「ハァ、桜咲は近衛を連れてけ」

「へっ、いやで「いいから」 解りました」
渋々引き受けた。

「ファ、俺は、眠いから帰るな」
俺は、ネギ達をおいて帰った。

）
続
く
）

修学旅行 2日目

「ハア」

俺は、昨日の事にため息をついていた。

「又か、何でそんなにため息をつく」 エヴァが隣で言うてくる。

「昨日の夜に襲撃があつたんだ、そんな時にちよつとな」

「誰かに、正体を知られたか？」

「ぐっ」

「凶星か、もう少し注意しろ」

「…わかった」

何で、エヴァに注意されるんだロ。

「てか、エヴァ お前らは、今日の予定どうするんだ？」

「簡単な事だ、剣仁貴様が案内しろ」

「…、わかった」

<昼飯中>

俺とエヴァは、詠春と来たことのある、店で食事をしていた。

「なあ、エヴァ」

「なんだ、ケンジ」

「頼むから、先生と呼べ先生と。それよりも、久々の外だからって
はしやぎすぎだー!!」

「はっ、そんな事か。　そう言う、貴様だって人の事を言えるのか
!!!」

「ぐっ、だが俺は、エヴァより騒がしく無い」

「二人とも同じだと思われませんが？」
茶々丸が言った。

「「ぐっ
」」

重苦しい中で俺は、　「…、エヴァ」

「なんだ」

「多分、明日の夜にエヴァの力が必要だと思っから手伝ってくれ」

「お前の力でなんとかならんのか」

「んじゃ、エヴァ俺は、お前に正式にこの仕事を依頼したい」

「良いだろ、報酬は、「1日お前の言う事を聞く」…、それで、良いぞ」

エヴァの目が、コワイ。

あつ、そう言えば、ネギがコクられるの、今日か。

マツイッカ、原作キャラとは、これ以上関わりたく無いし。

<旅館>

「いい湯だな、これで酒が付けば文句無いが」

俺は、一人で入浴中。

エヴァ達と旅館に帰ると、なぜかネギが疲れきった顔をしていたのが見えた。

「何で、困ってたんだ？」

「あつ、確か、朝倉に魔法がバレルのって今日か、てことは、朝倉が風呂に来るんじゃないか……！」

ガラ

俺が考えてると。

ガラ

誰が入って来た。

「あつ、すいません。表に札が無かったもので」

しずな先生登場！？

「あつ……！これは、すいません。自分は、今出るの「待ってください」はい……？」

そう言えば、朝倉が変装するのって、しずな先生だったな。

「何で、しょうか」ここは、のってやるか。

「ネギ先生について何ですか？」

「ネギ君になんかあったんですか？」

「ええ、私見てしまったんですよ、ネギ先生がま「魔法を使う所ですか」！！！」
かなり、焦っている朝倉。

「しずな先生いや、下手な、変装は、辞めたらどうだ朝倉」

「…、何時から気づいたんですか、剣仁先生」
元に戻ったな。

「俺と話した時の感じかな」

「先生もネギ君と同じ「魔法使いだせ」 えー！！！」
声でかすぎ。

「朝倉、こっち側に入るのは、止めとけ。下手したら、お前死ぬぞ」

「！？」

かなり、びびったか。

「俺は、先に出るぞ」

言いながら、風呂を出て行った。

その時は、朝倉の事を俺は、甘く見ていた。

「先生、そんなんじゃ、私を止められないよ」
興奮する朝倉だった。

<夕食後>

俺は、自分の部屋で愛銃の整備をしていた。

「そう言えば、まだエロガモに会ってないな？マッイッカ」
俺は、愛銃の整備を続けた。

ある部屋で事は、進んでいた。

「《くちびる争奪！！ 修学旅行でネギ先生&斎藤先生とラブラブキッス大作戦！！》」

朝倉とエロガモが手を組んでいたのだ。

「なんだ今の？」

俺は、やな感じがしていた。

俺は、内心まさかな、俺には、来ないよなと思っていると。

コンコン

扉を叩く音がした。

「誰ですか？ 鍵は、かかってませんよ」

「私だ、先生」

「真名か、こんな夜に何の用だ？」

「仮契約をしてもらっぞ、先生」

「はいー！？」

背後から気配を感じ、そこで気を失った。

「フー、すまんな楓」

「平気でござるが、やり過ぎでは、ないか？」

「いや、こうしないと私達がやられてた。それよりもさっさと片付けよう」

真名が俺の上に乗っかり、キスをしてきた。

「熱々でござるな」 誰だって、このキスシーンを見れば、言いそ
うな事を呟いていた。

<2分後>

俺が目覚めると顔を赤くする真名が座っていた。

「…、真名もしかして、仮け「仮契約だろ、やったよ / / /」
…、マジ」

「マジだが、かなり濃いのでな ／／／」
頬を赤くさせながら言うな。

「…、そっか。後でカードを見せるよ」

「?? 良いが、何で後でなんだ？」

「この首謀者を捕まえて、拷問にかけるからだ」

「…、やり過ぎじゃないか、ロビーで正座を朝までやらせとけば良くないか？」

「そうしてやるか」 俺は、朝倉達が居るであろう部屋に向かった。

＜とある扉の前＞

「気配は2つ、ここで合っているな」

俺は、開けてそっと入った。

「姉さん、早く逃げるぜ！…！」
こいつがあれか。

「そうね、早く逃げたほうがい」「逃げるだと」ひい！！ 先生！
「！！」

逃げそうになる2人を捕まえた。

「ヒィー!!」

「ちょっとお仕置きな」

「イヤだー!!」
2人の悲鳴が響いた。

〕 続く 〕

修学旅行 3日目

「先生、起きろ」

誰かが、俺を揺らす。

「んゝ、誰だ、俺の睡眠の邪魔する奴は？」

俺は、言いながら起きると、真名が立っていたのだ。

「起きたか、先生」

「…、毎度の事だが今回は、どうやって入った？」

「簡単な事さ、鍵が掛かってなかったからさ」

俺は、記憶の中に鍵のかけ忘れが有ることを思い出していた。

「そうか、悪いな真名」

俺は、何時も道理に頭を撫でた。

「／／／。それよりも、早く朝飯を食べに行くぞ」

（顔を紅くさせる、真名は、やっぱり良いわゝ。） 内心おもっちゃ
う俺。

「真名 先に行つててくんない」

「わかった？」

「さて、行つたか」 鞆から通信機を取り出した。

くぴー ホンタイ キドウ

ナマエ カイキュウヲ

「斎藤 剣仁
総司令だ」

<シヨウニンチュウ…カンリョウ>

無機質な声が響き終わると

「総司令!!! 何時まで、待たせるのですか？」

口うるさい、秘書が叫んできた。

「今夜、出る。」

例の部隊と物を用意しろ」

俺は、それだけ言い切った。

立ち上がり、真名の後を追った。

「夜　旅館内」

えっ、時間が跳んだって、何にも無かったからイイジャン。

「ヤッベ　寝過ごしたー!!」

俺は、旅館の廊下を武器を装着しながら　走っていた。

「エヴァー!!　行くぞ!!」

俺は、エヴァを見つけ連れ去った。

「離さんかー!!」

「無理だ!!　1分1秒が惜しいだ!!」

エヴァを脇に抱え、後ろからは、茶々丸が追っている。

「先生、一体何があるんですか？」

「ネギ達が、襲われている。それに、過去の遺物を潰すチャンスだ」

ロビーを通過していると真名・楓・古らが居た。

「おい！！そこ付いてこい！！」

「「「？」」」」

三人は、俺の方を向き

「仕事か？」

真名が俺に言う。

「どうせ、連絡が来てるだろ」「ゆえからのごさるな」「そうだが、それに強い奴も居るぞ」

「「強い」」

楓と古が食い付いた。

「ああ、いる。 てな訳でさっさと行くぞ！！」

そんな訳で俺らは、外に出た。

バーーーーー

UH-1が着陸していた。

「お待ちしてました。 ボス!!!」

中から兵士が出てきた。

「ありがとう、速く現場に行くぞ」

「はい!!!」

そんなんで、俺と5人で戦場に向かった。 えっ日本政府からクレームが来ないかだって？ 平気平気 政治家どもは、俺に弱味を握られてっから。

<機内>

「おい!! お前ら大丈夫か!!」

俺は、一言も喋らない真名達に言う。

「『……』」

無言状態が続く、そんな中

「目的地に後2分!!」
パイロットの声が響いた。

「…、作戦内容の復習だ。真名・古が化け物とこに行く。楓は、学ランを着たガキの相手。エヴァは、メインの破壊。これで、終わりだ」

「目的地上空!!」

「イケイケ!!!」 俺は、真名達にパラシュートを着けて放り出した。

「楓!! お前もイケ!!」

「解ったでゴザル」

俺は、後で三人から殺られると思った。

「ボス!!」

「なんだ? もうスクナが出たって言うなよ」

「スクナの方は、まだ平気ですが。特殊狙撃隊から連絡が来ません」

「…、本当か。そうするとミサイルの誘導は、どうするか？ …マ
ッイッカ」

「「「……」」」

なんか、この人大丈夫って見られてる。

「俺は、もう行く。 エヴァは、デカイのが見えたら、来てく
れ」
最終チェックをしながら言う。

「わかった。死ぬなよ」

「はっ、誰に言う。俺は、不死身だー！！」
叫びながらネギたちの元へ飛んだ。

ドゴンー！！
着地シッパイ。

「よう、フェイト今度は、殺しに来たぜ」
痛みを堪えながら言った。

<ネギサイド>

この白髪の少年に苦戦中に橋の一部が吹き飛び、そこから聞こえる声に驚いた。

「よう、フェイト今度は、殺しに来たぜ」

「剣仁さ　ガハッ！」

剣仁さんにきをとられて白髪の少年に吹き飛ばされた。

<剣仁サイド>

（たく、ネギも俺にきをとられるって…。）

「行くぜ、フェイト！！！！　　奥義・炎竜双火　えんりゅうそう
か　ー！！」

俺は、自分の体のいたる所から憤怒の炎が吹き出た。

炎竜双火　えんりゅうそうか
これの凄いところは、体が炎に成るため一時的な不死になり、体の
炎は、700度になる。

「オラ！！！！」

俺は、フェイトに急接近し右手のパンチ、肘うち、踵落としの順に繰り出した。

「やはり、部が悪い。ここは、引かせてもらつてよ」

消えた。

「あの野郎！！ またか！！」

ぶちギレ中の俺にスクナが攻撃してきた。

「邪魔だ！！！」

俺は、右手に炎を集め「吹き飛び、爆炎弾　ばくえんだん」殴つた。

スクナの顔が半分ほど吹き飛んだ。
俺は、炎竜双火を解きいて。

「エヴァ後ヨロシク！！」

電磁迷彩を起動させて逃げた。

「あいつ！！ 最後に面倒事を！！！！
まあ良い、坊や良く見とけ！！！」

「ありや、エヴァも本気だな」

俺は、石化した詠春の隣で勝手に酒を飲んでいた。

パキヤアアン

「あれが、エヴァの最強魔法……」

「ウツ　　ウウウ、なっ！！　なぜ剣仁がここに！？」

石化が解けた、詠春が俺を見て、驚いている。

「ふっ、本当に久しぶりだな詠春」

「ええ、いつの間にこちらに来たのですか？」

「教師だから。それよりスクナの封印をしとけ」

「ハハハ、わか「貴様！！　どこに居た」なぜ彼女が？」

「ここで酒を飲んでいた。ついでにエヴァは、俺が連れて来た」

「ハハハ、本当あなたは、ナギと一緒にですね」

「まっどうでも良いがな」

その後は、俺・詠春・エヴァで酒を飲み合った。

～続く～

修学旅行 4日目

只今、旅館の部屋でダウン中の俺。

「ウー、頭が痛い」 久しぶり友と酒を飲む事で羽目を外した結果がこれだ。

ドガッ

誰かが部屋に入ったようだ。

「行くぞ、けんじ!!」

「何で、エヴァは、平気なんだよー、卑怯だー!!」
俺と同じ量を飲んでも平気なエヴァが入って来やがった。

「そんな事は、どうでも良い!! 早く支度しろ!!」

「解ったから、叫ぶなエヴァ」
弱々しく話す。

支度中

「はー、出来たぞ、エヴァ」
スーツを着て、出てきた。

「フン、行くぞ、坊や達が待っているからな」
元氣一杯だな。

「あつ、剣仁先生、エヴァンジェリンさんもおはようございます！
！」
ネギに会った。

「おはよう、ネギ君」いつも道理に話す。

「おそかったな、坊や早く行くぞ」

「あれ、剣仁先生どうしてここに？」
アスナの質問。

「まっ色々な」

後ろの奴らから、質問の嵐が来そうだから早めに切り上げた。

移動中

詠春発見！！ 早速声をかけると。

「詠春、大丈夫か？」

「ええ、なんとか」

俺と詠春は、昨夜の事を思い出していた。

「なあ、詠春」

「どうしたんで「すまん、このかちゃんに魔法の事を知られたかも、知れない」…、大丈夫ですよ。私も、そろそろ、ばれれると思いますから」

「もし、このかちゃんが魔法を知りたいって言うたら」

「教えてあげてください、これは、親友の頼みとして」

「ああ、そうしよう」

「ネギ君達を待たせるのも、悪いですから早くいくとしましょう」

「そうだな」

「さあ、この奥です。 3階建ての狭い建物ですよ」

「てか、まだ在ったんだあれ」

「ハハハ、在りますよ」

「ねえ、剣仁先生と近衛のお父さんって知り合いかな？」
「パルが言う。」

「さあ、そこまでは？」
「長瀬の発言。」

「ここです。どうぞネギ君」

「なあ、詠春、本とか見せて良かったっけ？」

「平気です、読めないはずですから」

「どうですか、ネギ君」

「ハ ハイ!!」

「見たい物や、調べたい物がたくさんあります」

「それは、良かった」

「それよりも…父さんの事を聞いて良いですか」

「教えてやれば、詠春」

「そうですね、このか 刹那君 明日菜君こちらへ」

「この写真に写って居るのが、サウンドマスターの戦友達……黒い服が私で、グレーのスーツを着ているのが「俺だ」と言うことです」

「「「「えー！！！」」」」

「嘘、先生が？」

明日菜発言。

「そうだが、それがどうした？」

「まあ、こんなだからな、ケンジは」

「エヴァ 先生と言え先生と」

「…、剣仁先生が父と同じ立派な魔法使い」

「あー、立派な魔法使いは、辞めてくれ」

「えっでも「辞めろ」…分かりました」

「てな訳で、詳しい事は、帰ってからな」

「「「「はい」」」」

「んじゃ、先に駅に行ってるは」
その場から離れた。

く続くく

ネギへの試練

「ヒィー！！ エヴァの奴マジカー！！」 後ろから、魔法の射手が飛んできた。

なぜ、砂浜を全力疾走してるかだって？ それは、修学旅行から帰って、エヴァの別荘を借りて、体術・魔法の練習をしていると、別荘の持ち主のエヴァが来て

「久々に死合するか」

この一言により、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロの三人VS俺一人の戦いとかした。

「ケケケ、待ちヤガレ」

チャチャゼロがククリ投げてきた。

「チャチャゼロ！！ 刃物を投げるな！！」

俺は、即座に銃で撃ち落とす。

「油断大敵です。先生」

背後から茶々丸の蹴りが来たが、銃でそれを受け止めた。

すると、銃にヒビが入った。

「ンナ！！　　どんだけ強いんだ！！」

続けて、茶々丸の回し蹴りとチャチャゼロのナイフが飛んできた。

「クソ！！！」

俺は、その攻撃を転がってかわした。

「ハア！！　　150柱」

上空から魔法の射手が飛んできた。

「えっ！！　　ちょっと待てー！！」

俺は、エヴァが放った、魔法の射手が全弾当たった。

俺は、茶々丸に怪我の手当てをされながらエヴァに問いかけた。

「なあー、エヴァ、ネギを弟子にするって本当か？」

「まだ解らん、それに試験の結果による」

「試験？」

「そうだ、茶々丸と格闘戦で、一撃入れれば良いだけだ」

「…まず、茶々丸に格闘で勝つのは、無理だろー」

「知っている、だからケンジ、貴様がネギとやれ、久しぶりに腕がなるだろ」

「そうだな、そろそろネギの实力を知りたいし良い機会か」

「間違っても「殺すな」解って要ればいい」

「しゃーね、グローブを用意するか」

「ボクシングのか？」

「いや、俺が言ったのは、そ「総合格闘のでしょう」「…、茶々丸俺が言う事を先に言うな」

「すみません、マスターが解らなそうだったので」

「まあ良いや、エヴァ、ネギと戦うのって、いつだ？」

「ああ、今夜だ」

「ハァー、早いな、場所は、ど「世界樹の広場だ」解った」

俺は、立ち上がり、別荘から出ていった。

「眠いなー、早めに寝よう」

〵夜 自室〵

「ファー、よく寝た」

俺は、特殊部隊用の黒の服を着て、グローブをはめた。

「いたぶりに、行きますか」

俺は、エヴァの家により、エヴァを叩き起こし、連れていった。

先に、広場に来て周りに置いてある物の配置などを確認していると

「剣仁先生何でここに!？」

「やあ、ネギ君」

「坊や、今夜戦うのは、茶々丸ではなく、そこに居るケンジが相手だ」

「えっ!!　　そんな無理ですよ!!」

「ネギ君、ここで諦めるのなら、君は、父親に一生追い付けないよ」

「えっ！　ですけど！！」

「君は、父親を越えたいのだろ」

「はい！！」

「なら、紅き翼の1人と戦うのも、良い経験だろ」

「ですけど！！」

「戦う理由が欲しいのかい何なら、俺がギャラリーを人質にするのもいいな」

「えっ！？」

「一つ言っが、俺を倒さないと君の父親には、追い付けないよ」

「……」

「沈黙か、まあ、良いや。 さっさと片付けて殺るよ」

「えっ！！！」

「んじゃ、ルールは、変わらず、俺に一撃入れば良いだけだ」

「…、解りました」

さあどんな、戦い方をするんだネギ君。

「ハア！！！」

「うお！！！」

ネギは、俺の懷に潜り込もうとしたが、それを、俺は、後ろに下が
りながら避けた。

「クッ！！ まだ！！」

「遅い遅い！！」

ネギは、蹴りを入れようとしたが、俺の蹴りでそれを、止められた。

「ハッ ハッ！！」

「だから、遅い！！」

今度は、殴りに変わった、だが、それすらも、俺は、かわす。

「そろそろ、俺も攻撃するよ ホラ！」

「ガハッ！！」

俺は、防御から攻撃に切り替えて反撃した、まず、右ストレートをネギの腹に一発当てた。

「こんなじゃ、終わらないぜ！！」

「クッ！！ ガハッ！！」

ボクシングスタイルでネギを殴り続け、防御に隙が出来たら、そこに集中攻撃をして、ネギの胸を殴った。

「こんなもんか、ネギ　次は、ムエタイでいくぞ」

「「「!!??」」」

俺の一言で、ネギ、古、アスナが驚いた。

「どうしたお前ら?、俺がボクシング以外できるのが不思議か」

「待つアル!!先生他に何出来るアルカ?」

「ほとんどの格闘技が出来るぞ」

「えっ!!」

「ネギ君　油断大敵だよ!!」

ネギが驚いた瞬間に俺が蹴りを入れて倒した。

「待つて!!　先生!!」

「何だ、アスナ」

「全ての格闘技に通じてるって、卑怯じゃない」

「アスナ、俺は、勝つためには、何でも使うぞ」

「えっ？」

「例えば、お前らを人質にするのも、毒で弱らせるのも、勝つためになら何でもやるぜ」

「「^{もの}卑怯（アル）」」

「卑怯でどうぞ」

「ウオオオオ！！！！」 ヤッベ、ネギ 怒ったかも！！。

「良いねー、さあ来い」

この攻撃で殺られても立ち上がったら、合格にするか

強い 強すぎる、僕には、勝てない

なに、この圧倒的な差は

上から、俺、ネギ、アスナの順で内心想った。

「ネギ これで終わりだ！！！！ 奥義 岩砕き（いわくだき）！！！！」

「グアアアア！！！！」

俺は、奥義の一つ、岩砕きの弱い版をネギの腹を殴った。

ネギは、その衝撃と痛みで倒れた。

さあ、立ち上がれ ネギ・スプリングフィールド

「ネギ！！！！」

アスナがネギに近づこうとしたが

「アスナ、手を出すな」

それを、俺が止めた。

「そうです、アスナさん手を出さないで下さい」
徐々に立ち上がろうとするネギ。

「ハハハハ！！！！ 合格だ、ネギ・スプリングフィールド」
俺は、笑いながら合格を言った。

「えっ！？ なぜ」

「俺の試験は、どんな強敵に倒されても、立ち上がろうとする勇氣を試したんだ」

「ケンジ！！ 貴様！！」

「良いだろ、エヴァ」

「あ ありがとうございます！！」

「んじゃ エヴァ後は、頼んだ」

「待て！！ ケンジ！！！」

俺は、その場から逃げると、エヴァの声が響いた。

く続くく

修学旅行後

「貴様と言う奴は!!」

「悪ーございました」

「ふざけるな!!」

只今、エヴァからのキツイ説教中、
何でこうなったかだつて？

理由は、ネギの試験に有るんだ。
まあ、勝手にネギに合格と言って、逃げたら、次の日にエヴァに捕まり、説教を喰らわされ、今にたどり着く。

「なあ、エヴァ本当に悪かった」

「悪いと思うなら、貴様も坊やの訓練を手伝え!!」

「良いけど」

「そうか、なら、ついでに私と仮契約をしろ」

「…、それは、出来ない」

「なぜだ！！ まさか、すでに他と仮契約を！！」

「…、それについては、機密のため話せない」

「ホホ、そう言えば朝倉が真名に恋人が居ると言っていたな」

エヴァは、俺を見たまま言う。

俺は、エヴァと視線を合わさないように下を見ている。

「ケンジ、汗が凄いぞ」

「ハハ、大丈夫だ」 （ヤベー、バレたら死ぬ！！）

「そうだな、朝倉にもっと詳しく聞いて見るか」

「えっ！！ いや、ちょっと待て、言うから！！ 朝倉には、聞くな！！」

（朝倉の場合、俺の事をエヴァから聞き出すよな）

「最初から素直に言えば良いものお」

「解った、真名の事を話すが、仮契約は、しないからな」

「まあ、良い話せ」

「真名と仮契約をした」

「…、そうか」

エヴァは、詠唱し始めた。

「待て、エヴァそれは、洒落にならない！…！」

「ならば、私とも契約しろ！…！」

「いや　でも」

（ヤバい　ヤバい！！真名にバレたら…死ぬ）

「まあ、良い、茶々丸、用意しろ」

「はい、マスター」

エヴァの後ろで控えていた、茶々丸が動き出した。

「あの、まさかそれって」

俺は、茶々丸が移動した場所を見ると、魔法陣が書かれていた。

「ああ、契約の魔法陣だが」

茶々丸が俺の後に立った。

「なぜ、茶々丸が後に立つ」

「お前が逃げようとするからな」

すると、茶々丸が手刀を食らわした。

「ウッ!!」

ドサ

俺は、倒れた。

「さて、茶々丸、ケンジを魔法陣の所まで運べ」

「はい、マスター」

俺を担いで、魔法陣の中に仰向けに置いた。

「ケンジ、覚悟しろ!!」

そう言って、俺にキスした。

5分後

俺は、起きて、エヴァにゲンコツを一発食らわしてから、1時間程説教した。

「エヴァ 俺の仮契約カードは、どこだ」

「知らんが」

なぜか、慌て始めた。

「…、そうか」

俺は、素直に引いた。

「これを見せられんは」

俺に聞こえない様に1人呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n73111/>

異世界にきちまった俺！！

2010年10月9日16時53分発行